

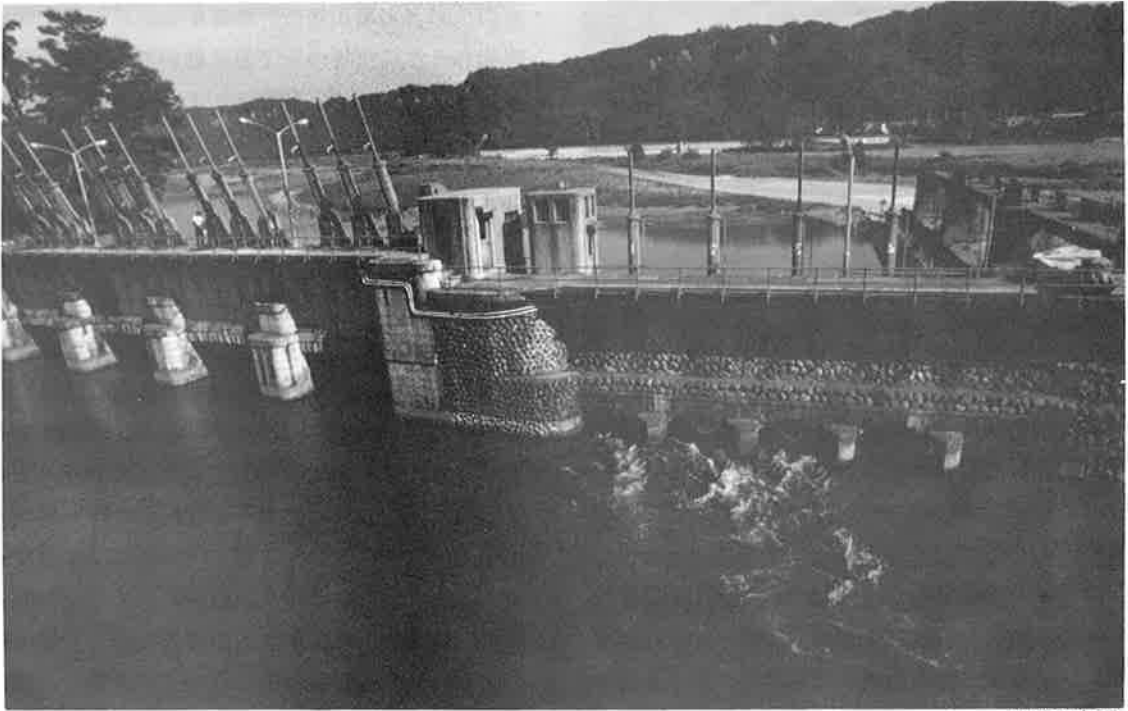
財団たより

# 多摩川

1980. 3. 第5号



初夏の川原に咲くカワラニガナ



羽村取水堰

## ■ 川のはなし ■

### ⑤ 下水道と水循環

汚れた川をきれいにすることはできるが、なくなった川はとりもどせない。にもかかわらず、いま日本では、どんどん河川がなくなっている。都市内の中小河川はもとより、大きな河川も次々と川でなくなっている。その犯人は、河川水の全面取水という水利用の体系と下水道である。

下水道が川を蘇らせるなどとはとんでもない嘘で、下水道は、しばしば河川を消滅させることによって建設されている。見かけ上河道は残っても、下水道がつくられることによって水がなくなってしまうこともしばしばある。いま、日本の下水道建設の主力は、流域下水道という巨大処理場建設に向けられている。流域下水道の場合、延長数十キロにも及ぶ幹線管渠が川の両側を走り、末端の海辺に巨大処理場がつくられることが多いから、処理場より上流には、排水が一滴も入らなくなり、川は、晴天時には水がなくなる場合も少なくない。川は、「汚れている」状態をとおりこしてなくなってしまう。これほど完全な環境破壊はない。いわば完全犯罪である。

下水処理の目的は何なのか？

われわれが快適に生きるためであり、そのために自然環境を守り、水を再び使用できる状態にして元にもどすためである。われわれは、便利な生活とひきかえにかなりの量の水を使っている。使った水を処理しただけきれいに自然に返すことは、自然とわれわれの生活を共存させるための最低の義務である。自然をとりもどすために、生活を原始にもどせという考え方もある。しかし、私は、こういう考え方には基本的になじめない。確かに過度に機械化した生活や使い捨ての生活、水の浪費はあらためなければならぬが、基本的に「元にもどる」という発想で対応できるとは思わない。人間の歴史は、大きな流れとして多くの人間が重労働から解放されてきた歴史であり、それに対する配慮をぬきに、片方だけを元にもどすことが可能だとは思えないからである。

(「都市の再生と下水道」 中西準子 1979 日本評論社)

## 多摩川散歩

### ● 奥多摩川海苔



海苔は周知のように、わが国特産の海産食品であるが、川でもノリが取れると聞いて驚く人がいるかも知れない。事実、山間では昔から川海苔を取って食用にしていた。カワノリは *Prasiola japonica* の学名をもつ緑藻類で、わが国では栃木県以西の本州、四国、九州の太平洋岸および東支那海に注ぐ限られた河川の溪流にだけ産するが、多摩川上流の渓谷地域にカワノリが生育し、山間部の人たちはこれを採取して食用にしていた。

江戸前産浅草海苔の比ではないが、奥多摩川海苔も、昔はこの地域の特産品として幅を利かせていた節がある。「新編武蔵風土記稿」や「武蔵名勝図会」にも川海苔を産物とする村落の記録が散見し、旧多磨郡の留浦村をはじめ境村、氷川村、日原村などでは、椎茸や山葵、手作布、山女魚、炭などと共に、川海苔をこの地域の特産品にあげている。また、今に残る地名にも、かつての奥多摩川海苔の盛時を彷彿させる名称があって、日原川水系の川乗谷、川乗山や南秋川水系での上川乗下川乗の部落名があげられる。別に川乗を川苔と表示もし、奥多摩と川海苔との因縁浅からぬものを感じさせる。

安 齊 忠 雄

奥多摩川海苔は、現在でも地元の人たちの手で取られているが、専ら自家利用の程度にとどまり、店頭で売られるほどの生産量はないが、昔は山間の町中で容易に入手できたものである。小島烏水の「わが多摩川の記」の文中に、「…多摩川海苔売れる氷川橋畔の一茅屋に憩いて、密柑を購入けるに、…」とあり、昭和の初期頃に川海苔を売っていた田舎町の食料雑貨店の模様が記録されている。川海苔は海産のノリと同様に、乾ノリとして利用するか、或は生の川海苔を三杯酢で食べるなどで、二昔ほど前までは、奥多摩の古い旅館でも客膳に乾ノリや生ノリが料理品目に加えられていた。

川海苔が生育する所は、山間の溪流地域に限られ、流量が比較的安定した細流で、清冽な山水が流れる川底の石に付着して育つ。夏の終わりから秋末にかけてが川海苔取りの時期で、採取者たちは冷たい流れに入り、岩に付いた川海苔を指先で一つ一つ掻きとって木綿の袋に集める。川海苔採取の作業は決して楽なものではない。一日中腰をかがめ、冷たい水の中に浸っての労働で、体はすっかり冷えきってしまう。川海苔を沢山取るのは女性の才で、一日に70枚から80枚分もの川海苔を取ると言う。川で取った原料を切りきざみ、それを簀で一枚一枚漉き上げて乾燥させる工程は、海産のそれと何ら変らない。

10年ほど前、奥多摩川海苔の調査に行き、お土産にと頂いた川海苔を食べて見た。外見は海産と少しも変わらないが、多少腰が強いように思われた。丁寧に火で焙り、生醤油を付けて早速賞味したが、海産のような磯の香りには欠けるが、味、舌ざわりとも高雅、上品と言うべきか、誠に結構なものであった。以来、奥多摩川海苔の味覚に接することはないが、折にふれ、再びあの深山の風合いに触れて見たくなる事がある。

(日本民俗学会々員・斎宣伝研究室代表)

## 多摩川と私

東京都世田谷区一丁目に大場さんと申される昔の代官の邸宅がある。先代に大場信続さんとおっしゃる明治の末期東京帝大の農学部出身の後継者がおられた。大場さんは、大学卒業直後から宮内省帝室林野管理局農務課長に就かれ、もっぱら皇室のご所蔵に係る農業地、又は開発適地の改良設計をたて、国策に基く食糧増産施設の根幹を主管された。私は大正7年学窓を巣だち、大場課長の下に就職させて頂いた。当時課長は、先輩の東京帝大の考古学の教授鳥居博士を招いて、宮内職員の為に「有史以前の甲、武、信」と題する講演を承った。私は余り関心を持たなかったが、入省直後の事でていねいにノートした。処が私はその後各地に転じ、後に神奈川県庁で、もっぱら多摩川右岸の治水と利水に関する技術行政を扱う事になった。当時急に往年の鳥居博士の講演を思い出し古いノートを引張り出した処、計らずも武州地方の学説中に多摩川の有史前の説が詳述してあった。先生の図示する処に依れば多摩川上流の稲城市矢野口付近から左、世田谷の丘陵地帯の根元を経て



図 鳥居博士の示された武州多摩川入りの入江の図  
(鉄道線は位置を示すため挿入した)

大田区の突端を通り品川山の麓に、右は川崎市多摩区菅仙石谷戸から高津区久地を経て、千歳<sup>チノシ</sup>の山麓を辿り横浜の日吉台付近に至る。今の平坦地一帯は有史前<sup>アノ</sup>の入江で大漁場であったとし、この底をなす岩層は東から西に傾斜した地形であったと説かれている。私は晩年川崎市の菅付近から溝の口を経て中原区木月付近に

## 平賀栄治



登戸地先宿河原堰堤の湛水池

至る間の土質を調査したが、昔年以来多摩川の急流に依り押し流された土砂は、上流部では石礫で、中流では砂土に変わり、下流部では泥土に変わっている。この実態については鳥居博士の説に一致している。現在では、上流部及び中流部の有史前の岩盤面上は押し出しの石礫の盲暗渠が成り立っている。従って多摩川の表流水の外に、上記盲暗渠内を潜流<sup>アノ</sup>する水が侮れない。昭和6年頃から、建設省は多摩川の河川改修工事に着工して、河川工学者が理想とする川形に改め、潜流の努めて表流化を図る事に尽した。その策のひとつは、左右岸に既設の灌漑用水取水の施設であった。この施設により表流の概ねを取水するときに、低水位の本川に潜流が集まり表流化する。所謂伏流水の誘導の働きを為す。又、河川改修に依り総じて河川の延長短縮に基く水面勾配の急流化をこの取水堰堤に於て是正する等、治水上のひとつ役をなした。又、平水時には堰堤による湛水池は良く住民の保養地として遊船、水泳又は、釣場として利用される。何れも沿岸住民の憩いの場所として活用される。

濁流溜々と流下する大河川も平時に於ては人間の憩いの場となる。これからも、多摩川の河川愛護に努め、より良き川になるよう期待したい。

(横浜市緑区在住)

よみがえ

# 甦れ！多摩川

## 多摩川「清流」公園計画

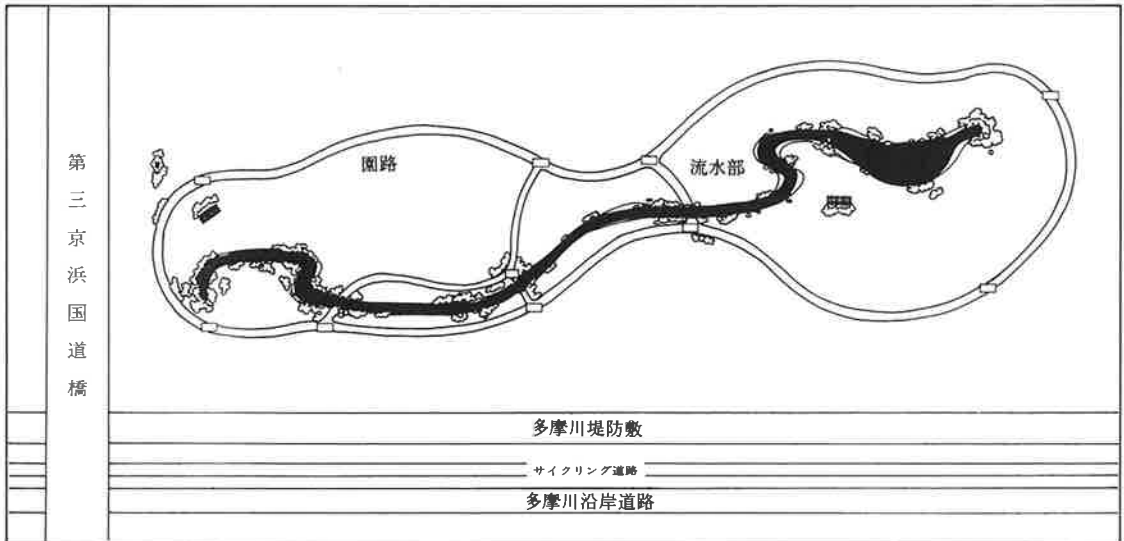
川崎市が、占用する第三京浜下流のゴルフ場跡を清流公園にすると発表したのは、昨年の暮の事であった。この計画は、第三京浜国道橋のもとに井戸を掘り、伏流水をポンプアップし、それを図に示したように一周させ、付近一帯を公園にしようとするものである。多摩川では、このように伏流水を使った公園は他にないが、淀川などの、河川敷公園の中では良く見られる。川の水が汚れ、又、低水護岸によって川に近づきにくくなっているこのあたりでは、水遊びもできない状態となっている。殺風景な公園が多い多摩川にあっては、水遊びのできる公園として注目すべき事であるが、川べりに清流公園が必要な現実、今の多摩川の姿を物語っている。

多摩川の河川敷の専用面積は、昭和54年3月現在で約400haある。この面積は、水域を除いた河川敷の約25%程度といえよう。主に多摩川流域の区、

市、町の公園やグラウンドに使われている。

多摩川の河川敷利用の歴史は、第一次大戦や関東大震災後の東京、横浜の都市建設に伴う砂利採石、その後、昭和10年頃からは、ゴルフ場、グラウンドに利用され、第二次大戦中は、ほとんど農耕地として野菜畑になっていた。戦後は、再びグラウンド、ゴルフ場、自動車練習場としての利用がなされていたが、民間企業のものが多く市民が自由に利用できる施設ではなかった。昭和39年の東京オリンピックを契機として、国民が自由に利用できるグラウンドや公園を造ろうとする機運が盛り上がり、民間企業の占用を返還させる。多摩川河川敷第一次開放計画が実施された。昭和41年7月の事である。それまでは、公共団体による公園やグラウンドは全くなかったが、開放後の昭和45年には一挙に約124ha、37ヶ所に増えている。そして現在では、約308ha、100ヶ所以上を数える

せせらぎと親子広場の計画図(川崎市)





第三京下の公園工事風景

までになった。こうした現象は、流域の都市化が進んだ結果、公園やグラウンド用地が堤内地側になくなったためと考えられる。

多摩川の河川敷を、今後、どう利用していけば良いかという議論はさまざまな機会に検討されてきた。否、今なお議論中と言えよう。そうした中で、(財)河川環境管理財団が設立され、河川敷の利用を目的としたマスタープランが作成された。利用目的に従って、5つの利用タイプに分け、それぞれの地区をゾーニングした最終報告がなされたのは、昨年のものである。そして、この計画により、川崎市が清流公園にしようとしている地区は、施設利用ゾーンに指定されており、人工施設を主体に自然的レクリエーション施設が共存する地区に設定されている。川崎市は当初、少年野球場、サッカー場を作る予定であったが、建設省の指導により、この清流公園計画が新たにつけ加えられたのである。

公園面積7.3ha、小川は、毎分2トンの汲み上げ水を水源として、全長250m、幅3~10mで、水深10cm程度の流れが計画され、図に示すようなデザインとなっている。完成はこの4月頃の予定である。この計画は、発表と同時に大きな反響を呼んだ。“多摩川を親しめる川に！”という願いは誰もが持っている事で、さまざまな意見が聞かれた。

「自然のまま放置しておくべきだ」、いや「みんなが利用できる公園にすべきだ」、「もっとグラウンドを造ってほしい」等……。そのどれを取っても、都市に住む人にとっては切実な願いばかりである。しかし、過去、いくらかの変容があったとしても、多摩川は、また自然の条件に恵まれた川である。そうした多摩川での公園造りは、代替性のあるグラウンドや街でみかける都市公園とは違うはずである。そうした考えが、この清流公園づくりの発想であったとすれば、大きな進展と言えよう。細い部分の問題は別にして、基本的には、新しい多摩川のイメージ作りのスタート台に立ったと思われる。

川遊びができなくなった事が、川に対する関心を薄れさせた大きな原因とも言われている。「川らしい川に」、「親しめる川に」、そして、新しい多摩川らしさを造り出す為に、この計画がきっかけとなれば意義ある前例となろう。建設省や河川環境管理財団は、今後、さらに、より川の自然や条件を生かした公園づくりを行なおうとしている。それが、従来の公園の概念とは違う、多摩川でなければというものであってほしい。そうした意味で、この清流公園は、ひとつの実験的試みと考えたい。

# 財団の事業紹介

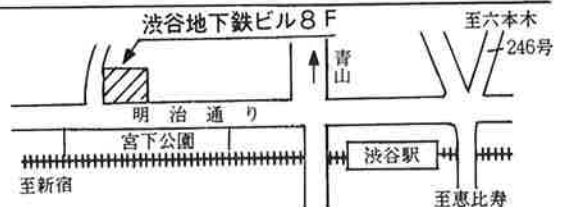
## 〈研究助成〉

昭和54年度最後の選考委員会を55年2月1日(金)に開催し3件の研究課題を採用決定、既に決定している33件と合わせて今年度は36件、研究助成金総

額は40,256,730円です。研究課題(財団だより第3号記載済み21件は除く)15件は次のとおりです。

研 究 課 題	代 表 研 究 者	所 属
〈A類研究〉		
多摩川中流域における自然環境の変容 ～中小河川・用水網の廃止にともなう土地利用形態 の変化～	沢 田 清	日本大学文理学部教授
多摩川流域の大気環境に及ぼす地表面の熱的能力 に関する研究	会 田 勝	横浜国立大学教育学部助教授
浅川本流およびその流域に関して環境管理の具体 的方法を研究・調査	加 藤 迪	日本放送協会チーフディレクター
多摩川中・下流域における有機汚濁質の研究	落 合 正 宏	東京都立大学理学部助手
多摩川中流域における水質の動態に関する水理学 的解析	河 原 能 久	東京大学工学部文部技官
多摩川の水利開発史と水利調整に関する研究	宮 村 忠	日本河川開発調査会
水路を利用した水質浄化工法と二ヶ領用水清流化	有 水 彊	農林水産省林業試験場主任研究員
〈B類研究〉		
橋梁による多摩川の地域文化の変貌と環境破壊の 調査研究	石 井 作 平	たまがわ、こども文化の会代表
多摩川流域の地形と居住 ～神社の立地を例として～	内 田 和 子	都立福生高校教諭
多摩川に流入する河川、浅川の水質に関する化学 的、生物的調査	舛 田 辰 郎	都立日野高校教諭
多摩川下流域の大腸菌群の消長と水質汚濁について	竹 村 彪	川崎市立橋高校教諭
多摩川支流である野川における水質、流量等を調 査する	児 玉 公 一	調布市立第四中学校教諭
多摩川における簡易水質調査法の研究 (1. アンモニウムイオンの検出法及び定量法)	長 沢 真 一	都立府中工業高校教諭
多摩川中流域における湧水と本流の水質汚濁の検討	池 島 厚 子	都立京橋商業高校教諭
浅川支流(湯殿川、兵衛川)における底生生物と 水質の調査	露 木 達 夫	都立片倉高校教諭

- ・発行日 昭和55年3月5日
- ・編集兼発行 (財)とうきゅう環境浄化財団  
〒150 渋谷区渋谷1-16-14  
(渋谷地下鉄ビル内)  
TEL (03)400-9142



\*印刷所 雄文社 〒336 浦和市常盤9-11-1  
TEL (0488)31-8125